平成１８年度卒業論文

トルコにおけるヌルジュ運動の現在
～インターネットでの活動を中心に～

東京外国語大学　外国語学部
南・西アジア過程　トルコ語専攻
8503019　近岡由紀

（35 文字×30 行）
27954 文字

序章 **2**

第一章　NURSI の考え **3**

第一節　旧サイド 3
第二節　新サイド 5
第三節　第三のサイド 7

第二章　ヌルジュの形成と組織 **9**

第一節　これまでの分派と性格 9
第二節　フェトフッラージュの研究動向 10

第三章　ヌルジュの活動内容～新アジア派～ **12**

第一節　新アジア新聞 12
第二節　新アジア財団 13
第三節　新アジア出版 14
第四節　雑誌『橋』 15
第五節　雑誌『心の兄弟』 16
第六節　雑誌『若さに接近』 17
第七節　雑誌『私たちの家族』 18
第八節　光の書簡研究所 19
第九節　私たちのラジオ 20
第十節　ウスパルタヌル 21
第十一節　ユーロヌル 22
第十二節　キプロスヌル 23

第四章　新世代派 **25**

第一節　新世代出版 25
第二節　モラル FM 26
第三節　モラルニュースネット 27
第四節　モラル雑誌 28
第五節　新世代カレンダープロモーション 29
第六節　新世代料理サービス 30
第七節　モラル文化センター 31
第八節　モラルプロダクション 33

第五章　インターネットでの活動の特徴 **35**

終章 **37**

参考文献 **38**

序章

Bediüzzaman Said Nursi とは、トルコ共和国成立期の政治、宗教を語る上で欠かすことのできない人物の一人である。彼はクルド人で、幼少の頃からイスラームの知識を短期間で学び、モッラーとして尊敬を集めた。その後政治にも興味を示して数多くの政治活動に参加し、何度も逮捕、釈放されるという経歴を持つ。また『Risale-i Nur（光の書簡）』という著書も残し、後のトルコや現在のトルコにも大きな影響を与えた。彼の思想はきわめて独創的で、コーランやシャリーアを重んじながらも、他のイスラーム系団体が比較的否定的な態度をとっていた西洋の文明や科学にも重要性を見出していた。[1]

Nursi の死後、彼を尊敬する人たちがヌルジュとして活動を続けて、各地にある「dershane（デルスハーネ）」（dershane、勉強会の場所）において「光の書簡」の勉強会を行なっている。また各言語で閲覧することができるホームページを数多く管理し、Yeni Asya（新アジア）という新聞やその他子供向けや若者向けの雑誌を発行するなど現代においても活発な活動を続けている。しかしその現状は他のイスラーム系団体に比べ、研究がなされていない。[2]また一口にヌルジュといってもヌルジュの中では多くの分派に分かれており、その各分派によって主張や考え方も異なっているといわれている。

私が本稿で扱いたいポイントは、Nursi がなぜそれまでに尊敬を集めていた人物であったかという背景、そして Nursi の死後なお活動が続けられているヌルジュ各派の考え、そして今現在もヌルジュが現代トルコ社会へ向けて、インターネットを通して発信しているメッセージを明らかにするということである。その手段として、1970 年から創刊されている新アジア紙ならびに新アジア派から派生した新世代派の活動内容を詳しく見ていきたいと思う。

第一章ではまず Nursi がどんな人物だったかを考察するために、Nursi の生涯と当時のトルコ共和国の時代背景と関連した思想の変化をまとめていく。続いて第二章では、Nursi の死後、ヌルジュの形成や分派、その活動について述べていく。第三章では、現代における新アジア派の活動内容として、インターネット上のホームページを中心とした現在運営しているサイトや財団、出版社などの特徴をとらえ、分析する。同じく第四章では新世代派のホームページに見る活動を分析する。第五章では両新アジア派、新世代派の活動内容の特徴のまとめとして自分なりの結論を出す。

---

[1]粕谷元「トルコのイスラーム潮流―ヌルスィーとギュレン」小松久男・小杉泰編『イスラーム地域研究叢書②現代イスラーム思想と政治運動』東京大学出版会 2004（以下粕谷論文と記する） p.73

[2]ヌルジュについてはフェトフッラー・ギュレンを中心とするサイトについての研究が進んでいる（後述）が、フェトフッラーはヌルジュではないという議論もなされている。

第一章　Nursi の考え[3]

Nursi Said は、自分自身で、生涯の思想の発展が 3 つの部分に分かれるとしている[4]。その 3 つは、Old Said（旧サイド）、New Said（新サイド）、そして Third Said（第三のサイド）である。それぞれのサイドは時代背景や生活環境が変わる上で必要に迫られて変化していき、別の人格として本人は扱っている。したがって Nursi の思想の変化、政治に対する考え方などはこの区分において分けることが適している。本稿では、その 3 つのサイドを順番に見ていき、理解を深めたいと思う。

第一節　旧サイド

Nursi は 1876 年にアナトリアのビトリス州フザン郡の田舎のヌルス村で、宗教学者（モッラー）の子として生まれた。父の名を Mirza、母の名を Nuriye という。宗教熱心であった親の元、ウラマーであった兄の影響もあり、9 歳の頃からイスラームを学ぶために Tağ 村の学校に通い始め、Mehmed Emin Efendi から教育を受けた。1890 年には政府の方針により近代科学の本が数多く出版され、電話、地理学、産業化学、宇宙学などの知識を独学で学んだ。1891 年、Nursi が 15 歳の頃、Bayezit メドレセにおいて普通の人なら 10 年以上かかって学ぶはずの近代科学やイスラームの知識を、をわずか 3 ヶ月で学び、その聡明さから「ベディユッザマン（Bediüzzaman）時代の驚異」という敬称を与えられたという。[5]彼はモッラーとなり各地を訪問し、講演を続けていった。16 歳には、講演の過程で訪れた町であるマルディンで何らかの影響を受け政治に興味を持ち始め、Namık Kemal の自由と平等な教育の権利、進歩的な未来を掲げた主張にも興味を持っていったという。また同じくビトリスではコーランの大切さを再確認したという。

その後、1897 年、彼が 20 歳の頃から 8 年間、アナトリア東部の主要都市ヴァンに滞在した。その間ホルホルメドレセを設立し、ここで教育の必要性と、宗教的科学と近代科学を融合させるという Nursi 独自の考えの基礎を確立させたという。この頃は近代科学や世俗に無関心な宗教人と、宗教に無関心な知識人が論争を繰り広げていたが、Nursi は両方の知識を得ることが必要だという観点に加え、クルド人が数多く生活していたアナトリアに「光明学院（メドレセテュッゼフラ）」という大学を設立させ、クルド語とトルコ語、アラビア語での教育を行うことができるようにするという目標を持ち、1907 年政府に許可を求めイスタンブールに上京するが、支援を得られずに実現させることはできなかった。

1907 年以降、彼は政治活動に関わっていく。1909 年 2 月 5 日には反「統一と進歩協会」政治結社である「ムハンマド統一協会」の設立に加わり、ムスリムの連帯とシャリーアの試行を主張したムハンマド統一協会の機関紙である『ヴォルカン（火山）』紙[6]にいくつか

---

[3]本章は粕谷論文と Şerif Mardin, *Religion and Social Change in Modern Turkey*. New York; New York Press, 1989（以下 Mardin 論文と記する）、さらに Nursi 公式伝記のホームページ http://www.witness-pioneer.org/vil/Books/SV_Nursi/p1ch1.htm による。

[4]粕谷論文 p .71

[5]Nursi の信者たちは Nursi のことをベディユッザマンと呼ぶ。

[6]当時の統一と進歩委員会に反対する人の重要な先導役であった。Nursi 公式伝記

の記事を載せた。さらに同年の約一週間後、イスタンブールのアヤソフィアで起こった「3月 31 日事件」[7]に加わり、数百人の逮捕者の中の一人として捕まるが、証拠不十分で釈放され、処刑を免れる。その後 1910 年にはイスタンブールを離れ、アナトリアへ向かった。

1910 年の冬、Nursi はダマスカスに到着した。現地ではコーランの再認識の必要性と、ムスリムが皆民族を越えて協力する事の重要性を強調した演説を行なった。その後すぐイスタンブールへ向かう船に乗り、上京した。その理由は以前から考えていたアナトリアに大学を設立するという目標のため、政府に援助要請をするためだった。そのとき当時のスルタンであったメフメットはルメリアン(Rumeli)の士気を高めるためルメリア訪問を計画しており、1911 年 6 月 Nursi も東部地区の代表として同行した。訪問の最後には、大学設立の許可と援助をもらうことができ、創立記念パーティーでは当時のヴァン市長でもあり Nursi の友人でもあった Tahir Pasha も Nursi と共に演説を行なったが、1914 年第一次世界大戦勃発によりついに大学の設立は実現することはなかった。

第一次世界大戦はムスリムにとっての聖戦であると考え、Nursi は自らも従軍した。そして 1916 年 3 月ビトリスがロシアに占拠され、彼自身も 2 年間ロシア軍の捕虜となる。1918 年には無事イスタンブールに生還するが、その脱出方法などは明らかにされていない。Nursi の帰国は 1918 年 6 月 25 日地元の新聞であるタニン紙に報道されている。敗戦したオスマン帝国領土はイギリスやフランスに占拠された。

帰国後、Nursi は二つの機関に関与している。まず一つ目は 1920 年 3 月 5 日に創設され、Nursi も創立に関わったとされる「Yeşil Hilal Cemiyet（緑の三日月団）」[8]である。活動内容は、西欧からの占領に伴い徐々に広まってきていたアルコール飲料など害のあるものの常用を食い止めようとするものだった。二つ目は、「Medrese Teacher's Association（Cemiyet-i Müderrisîn、メドレセ教師協会）」である。1919 年 2 月 15 日に設立したとされるこの組織の主な目的は、ウラマーになるために教育を施すために、これまでのイスラーム知識を教えるだけではなく、時代とともに増加しているイスラーム科学の知識を増やし、また同胞同士の絆やつながりを強めていき、個人での意識を高めることの大切さを生徒に伝えていくこと、そしてメドレセ教師たちの権利を守ることであった。[9]

また 1919 年には独立戦争が勃発した。イスラームやオスマン帝国のための聖戦であると判断した Nursi は、イスタンブールで勢力を伸ばしていった「国民軍」[10]としてまたも従軍し、1920 年 4 月 23 日、アンカラに大国民議会が設置された。1922 年 10 月 11 日にはイギリスとトルコによってムダンヤ休戦協定が締結され勝利が確定し、1923 年 7 月 24 日ローザンヌ条約によって国際的にトルコは独立戦争に勝利したことが認められた。そしてオスマン帝国の 407 年間続いたカリフ制も、1924 年 3 月 3 日に廃止された。

しかし独立戦争に勝利したトルコは、アタチュルクによって世俗改革が行なわれ、イス

HP(http://www.witness-pioneer.org/vil/Books/SV_Nursi/Default.htm)より

[7]青年トルコ人革命への反革命。詳しくは粕谷論文 p .69

[8]緑の三日月団とは非政治組織である。

[9]メドレセ教師協会は 1919 年 11 月 24 日には「Society for the Advancement of Islam（イスラムの発達協会）」という名前に改正しているが、その後は Nursi は関わりを明らかにしていない。

[10]「国民軍」とはアタチュルク派のことをいう。

ラームを大切にするという精神から遠ざかってしまう。同 1923 年 4 月 17 日、失意の元に Nursi はヴァンに帰省する。

第二節　新サイド[11]

ヴァンに戻った Nursi は、ヌルシンモスクを教育の拠点とする。より標高の高いところ、つまりより神に近いところからの祈りも大切であるとした Nursi は 1924 年から 2 年の間、エレッキ山で生活をし始める。しかし毎週金曜にはヌルシンモスクで説教を行なうことが習慣となっていた。新サイドとなった彼は、弟子たちにもその変化がみてとれるような変わりぶりであったとされ、主に信仰の基礎、信仰の主義などを説いていたという。[12]

1925 年 2 月 13 日、ナクシュバンディー教団のシャイフであるシェーフ・サイードが率いた反乱が勃発した。同年 3 月 25 日には、Nursi 自身は関わっていないにもかかわらずイスタンブールに呼び出され尋問された。これが Nursi の 25 年間の追放生活の始まりとなった。1926 年 1 月にウスパルタ県に移動し、メドレセで教えはじめるが、政府に知られ、バルラに流刑となった。彼は 8 年と半年バルラに滞在し、その間『光の書簡』の大部分を書き上げた。そして彼が書いた文章は、弟子から弟子へ、村から村、町から町へと弟子たちの書写により広まっていき、トルコ全域にまで広がったという。

また「Onuncu Söz（十番目の言葉）」という文章は、印刷することに成功している。文章が完成したと同時にある商人がイスタンブールの弟子に依頼し、すぐさま 63 ページの本となり、Nursi に手渡されると、弟子たちに配布したという。バルラに滞在していた間の彼の生活はというと、よく体調を壊し、毎日少しのスープと少しのパンしか口にせず、山や近くの湖を散歩し、書き物や説教をしながら暮らしていたという。

同時に、当時は Nursi たちにとっては厳しい時代であった。政府の政策によりまずメドレセとスーフィー教団のテッケが廃止され、1928 年にはアラビア文字からラテン文字への切り替えである文字改革が行なわれ、32 年にはアラビア文字を使うことへの罰則も制定された。活動の内容が大きく制限される中で、Nursi は次第に多くの人の支えとなっていたという。

1934 年、Nursi はウスパルタにいる弟子に、私はどこへも行くことができない、もう耐えられない、墓の中にすんでいるようだ、という内容の手紙を書く。手紙を受け取った弟子の Tenekeci Mehmed はすぐさまこの手紙を持って政府に抗議し、翌日同年 7 月 25 日、Nursi はウスパルタに移動させられる。そのまま彼は翌年 4 月までウスパルタに滞在した。その間に 130 の部分からなる全ての『光の書簡』を完成させ、弟子たちは手書きで書写した。そして「Nur Postacılar（ヌル・ポスタジュラル）」[13]と呼ばれる秘密組織を通してトルコ全土に配布されていった。

秘密組織の存在が明らかになってくると、宗教宣伝と宗教結社を禁じる刑法第 163 条に反したという罪で 1935 年 4 月 25 日 Nursi とその弟子たち何人かが『光の書簡』を所持

---

[11]粕谷論文 p .69-77、公式伝記 HP より

[12]『光の書簡』を読み教えを受ける者たちのことをここでは『光の書簡』の生徒たち」という表現を使うことにする。

[13]ヌル・ポスタジュラルとは日本語ではヌル配達人のこと。

している罪で逮捕された。[14]当時 Nursi と一緒にいた弟子たちだけでなく、ミラス、アンタリア、ボルヴァディン、ヴァンなど各地でも逮捕者が出た。5 月 12 日付近には、彼を含む 120 人が刑務所のある Eskişehir（エスキシェヒル）に移動させられた。法廷で『光の書簡』は政治活動や宗教を広めるためではなく個人の信仰を高めるために書いたということや、これまでの 8 年間田舎に住んでおり新聞も開いていない[15]という証言にもかかわらず、Nursi は上級刑事法廷で 11 ヶ月の実刑判決を言い渡され、収監された。

1936 年 3 月、彼はエスキシェヒル刑務所から釈放された。そしてカスタモヌ（Kastamonu）という黒海の南にあるウルガズ山に送られた。Nursi はそこで 7 年半の月日を過ごすことになる。その町でも賃貸の家は持っていたものの、自ら山に登り、山上でも生活を送っていた。彼は毎日『光の書簡』の清書や説教、礼拝にいそしんでいた。また、ここでもヌルポスタジュラルが活動をするようになり、『光の書簡』が広まったバルラに続き第二の拠点として知られている。[16]また、『光の書簡』の役割とは個人の信仰を正し、当時のイスラーム教に対抗する政府からイスラームを守るためとしている。それは永遠の命と永久の幸福への鍵と基礎になるとしている。

そして彼はカスタモヌにいる間、Âyet-ül Kübra（至高のしるし）という文章を完成させ、その内容は、宗教と科学が正反対のものであるという従来の考え方とは違う見方が顕著に現れている。また、礼拝という決まった事柄をやることではなく、自身で成長のために瞑想することの大切さを説いている。また、1940 年にはカスタモヌの高校生が Nursi を訪れるようになり、そのとき初めて『光の書簡』をラテン文字で書写することを許した。それから若い世代にも『光の書簡』が広まり始めたという。

1943 年から、デニズリ（Denizli）地方で、『光の書簡』の生徒たちが逮捕され始め、次第に捜索の地域が拡大されていき、ついに 1943 年 9 月、Nursi 自身も逮捕されアンカラに送られた。政府で尋問された後、ウスパルタに送られ、一ヶ月以内に 106 人の生徒たちと共にデニズリ刑務所に留置されたという。その罪の内容はというと、エスキシェヒルの時と同じで、スーフィー・タリーカを作り、社会に宗教を広め、反政府的活動をしたというものだった。しかし判決は覆り、1944 年 6 月 16 日に釈放された。当時は第二次世界大戦の後のアメリカの影響で、更なる自由と民主化を推し進めていきたいという政府の思惑があったため今までよりも厳しく宗教活動を制限していたという時代背景もあった。

その後デニズリのホテルに一ヵ月半ほど滞在し、政府から 400 リラを受け取り移動し始め 1944 年 8 月 21 日、Emirdağ に到着した。彼は 7 年間政府に監視されながらもこの地に滞在することになる。そこで彼は 1945 年 Mehmed Çalışkan の息子であった当時 12 歳の Ceylan を養子「内面の息子」として迎え入れる。Ceylan は後に『光の書簡』の生徒たちの重要な指導者となる。

1947 年、イネボルの生徒たちは当時のトルコに初めて複写機を輸入し、それが『光の書簡』の複写に有効だとわかるとイスタンブールの生徒が二台目を購入し二年半もの間『光の書簡』を広めるのに役立てた。また同年にはハッジ（巡礼）が許可され、トルコ国内だ

---

[14]ここでの法廷が最初にヌルジュという表現を使用した。粕谷論文 p .69
[15]当時新聞は政治思想を大衆に明示する場であった。
[16]この時期は実際ポストを使った活動はほとんどしていない。

けでなく『光の書簡』はエジプトやダマスカスなど他のイスラーム地域にも広がっていった。そして同時期には、宗教離れしていくトルコ国民とトルコの将来を危惧し、政府や政府関係者に「トルコは西欧化していき宗教と無関係になっていけばトルコは滅びるだろう」という内容の手紙を送っていた。しかし政府はその後も変わらぬ方針を打ち出し、さらに同年首相であった İsmet İnönü がエミルダーの近隣の市であるアフヨン（Afyon）で「宗教はこの田舎町をだめにする」という内容の演説を行ない、彼への迫害がより強いものとなった。翌年 48 年にも Nursi の家まで警察が尋問に来るが、逮捕までは至らなかった。Nursi だけでなく彼の生徒たち計 54 人が尋問された。

しかし Nursi はすぐにアフヨン刑務所に連行される。罪は変わらず宗教を広めたことであった。今回は何の法廷手続きもなしに刑務所に入れられたという。彼はそこで 20 ヶ月の時を過ごした。刑務所内での食糧は、刑務所内でまかなわれるものはお金を払わなくてはならず、Nursi は生徒たちが作ってくれたスープを飲んですごしていた。また老体の彼にとって、刑務所での寒い冬は耐え難く、何度か生命の危機に陥ったという。

1949 年に Nursi の裁判が開かれたが、判決は覆らず、Nursi には 18 ヶ月の実刑判決、生徒たちの大部分は 6 ヶ月の判決が下された。しかしそのとき既に 18 ヶ月を刑務所で暮らしていたため釈放される。1950 年には民主党が政権を握るが状況は改善されず、控訴したにもかかわらず 1951 年『光の書簡』は差し押さえ処分という判決が下った。

第三節　第三のサイド

粕谷氏によれば『光の書簡』の完成と 1950 年の民主党政権の誕生は「The Third Said（第三のサイド）」への転換点となったという。[17]新サイドと第三のサイドとの明らかな相違点は、政治への関与である。新サイドでの軟禁から解放されることもきっかけとなり、Nursi は次第に政治にも関わり始めていった。

1952 年「マラティア事件」が起こり、政府がイスラーム系の新聞をすべて廃止し、当時 Büyük Cihad というイスラーム系の新聞の編集長や関わった人物も逮捕された。そのとき Nursi もイスラームを象徴する帽子を脱ぐことを拒否しエミルダーからイスタンブールに呼び出された。しかし間もなくエスキシェヒルに戻った Nursi は、もう一度ウスパルタに行きたいと言って少数の弟子たちと旅に出る。またこの時期に『光の書簡』の勉強会として『光の書簡』を音読し理解を深めるために「授業（ders デルス）」を行ない始めた。このデルスは弟子たちによってトルコ全土に広がっていった。1954 年になると 8 年間の月日を過ごしたバルラに向かった。

政治的観点からはというと、1955 年のトルコのバクダッド条約調印に関しては、ムスリムの連携であるとして支持し、また近隣のイスラーム国家が植民地から独立したことと関して、イスラーム連邦（the United Islamic States）という名の国を作ることを考えてさえいた。

1956 年アフヨン上級刑事法廷で『光の書簡』は共和国のいかなる法律にも違反しないという判決が下り、『光の書簡』に関しての全ての制限がなくなり、都市部では『光の書簡』

[17]粕谷論文 p .77

の印刷が始まった。アンカラ、イスタンブール、サムスン、アンタルヤの 4 県ではラテン文字の印刷も行なわれ、急速に広まっていった。若い弟子たちへの教育も『光の書簡』を通じて行い、イスタンブールで初めてのデルスハーネはスレイマニエモスクの近くに設置された。1958 年には政府がエルズルムに「アタチュルク大学（Atatürk Üniversitesi）」を設立したが、52 年頃に大学の設立の情報を聞いたとき Nursi は若き日に構想を練っていた「公明学院」が実現するチャンスと考え政府に自身の考えを書いた手紙を送った。しかし彼の努力もむなしく設置場所もヴァンを望んでいたがエルズルムになり、大学の名前も Nursi が考えていたものとはまったく異なるものであった。

1957 年 10 月の総選挙では、民主党と共和人民党が政権を争い、当時民主党も支持率を下げていたが勝ったのは民主党であった。Nursi の生徒たちが民主党を支持していたからだと当時の共和人民党党首である İnönü も述べているほどの影響力であったという。しかしこの頃から生徒たちが逮捕されるという事件が都市部において何件か起こり、その釈明のために Nursi 自身も『エミルダーラヒカス』(Emirdağ Lahikası)という雑誌で自らの旅行記を書いた。

また 1959 年から 1960 年は、都市部のデルスハーネを訪ねる旅に出た。晩年の Nursi は体調が良くなかったにもかかわらずデルスハーネに訪問するためにイスタンブール、アンカラ、コンヤに出向いた。特にアンカラでは、民主党に公の場で『光の書簡』は何者にも制限されることはないと公言させるという目的もあったが、成功はしなかった。その頃の彼は死を意識し始め、墓の場所は誰にも知られたくはないと手紙に書いていたという。

体調の悪かった Nursi は、自ら死期を悟り、最後はトルコ人、アラブ人そしてクルド人が共存しているウルファで死にたいといって車で向かった。警察に連れ戻されそうになりながらも、弟子に見守られながら 1960 年 3 月 23 日、永遠の眠りについた。

一度はウルファに埋められた Nursi の遺体は、1960 年 7 月軍によってウスパルタのどこかの山に骨が移動された。

第二章　ヌルジュの形成と組織

これまではNursi自身の生涯をみてきたが、その中でも特にNursiの晩年において弟子たちの役割は大きい。『光の書簡』の普及活動についても弟子たちの自主的な手書きでの複写、デルスハーネの運営に関しても弟子たちの役割は増していった。またこれまで、「Nursiの弟子たち」という表現を使っていたが、初めて「Nurcu（ヌルジュ Nursi の弟子)」という表現を使ったのは、上述のように 1935 年の上級刑事法廷によってであった。また最初の弟子とされている人は、Nursi がバルラに追放されている時にできたとされていて、最も明確な弟子であった人は（多くの手紙に記されていることから）Hulusi Yahyagil という警部であったという。[18]

このようなヌルジュに関する多方向からの研究にも関わらず、ヌルジュという組織の研究は Nursi の思想の研究に比べまだ浅い分野であるといわれている。[19]また、ヌルジュの規定などは具体的かつ明らかな形では決定されていないというのもまたヌルジュの曖昧さの原因といえる。したがって分派に分派を重ねて発展していったヌルジュたちを、大きなひとつの組織として捕らえることは困難である。

第一節　これまでの分派と性格[20]

ヌルジュはNursiの死後、基本理念（『光の書簡』の普及やそれに指針を求めることなど）は同じとするが、様々な主張の相違において分派することとなる。
信仰の神髄の解明や（Nursiの支持した)民主党の使命を継承した保守系政党の支持、宗務国家公務員の育成の支持や内外の反無神論、反共勢力との共闘、また『光の書簡』の重版の仕方など、様々な特徴に基づいて分派し、分派した数は中田によると8派になる。

1962年「書家派」が初めて分派した。彼らは『光の書簡』がラテン文字で転写されるのが納得できず、自分たちでオスマン語での転写、出版を手がけた。彼らは現在もアンカラ市内に20ものデルスハーネを所有している。

またヌルジュは一般的に民主党を支持していたが、国家秩序党のエルバカンを支持するグループも分派した。しかし国家秩序党の解体後、国家救済党という党名になり、共和人民党と連立したことによりそのまま国家救済党を支持するグループと、支持をやめたグループにまた分派した。

1975年になると、『勝利（Zafer)』がチュルダウ出版によって創刊された。追って1976年には『砦（Sur)』がサカルヤ教育慈善基金によって出版された。『勝利』誌は画像や図表を多用しイスラーム的奇跡を強調し、また宗教的象徴主義と科学の結合を主張していた。一方『砦』誌はメフメト・シェヴカト・エイギ、ヘキムオウル・イスマイル、ヴェジュディ・ビ

---

[18]Mardin p .156
[19]大庭竜太「現代トルコにおけるクルド系ヌルジュ運動――メド・ゼフラの事例を中心に」『オリエント』49.　1：185－202 2006（以下大庭論文と記す）p.186
[20]第一節は主に中田考「トルコのイスラーム主義「ヌルジュ」運動――フェトフッラージュを中心に」『中東研究』461：2-21 2000（以下中田論文と記す）に依拠する

ュルン等[21]有名右派著述家を編集委員に抜擢し、国家主義的イスラーム主義路線を扱っていた。また『砦』誌は次第に日常の社会的な話題も扱うようになった。両誌の目的はというとイスラーム普及に役に立つ現代科学思想の資料情報を提供することであった。

1970 年後半になると、フェトフッラージュも分派した。フェトフッラージュとは、フェトフッラー・ギュレン(1938～)を指導者に仰ぐジェマートで、1980 年代以降の国家の宗教経済化政策と時を同じくして経済活動の自由を強調し実業家たちの支持を集めた。活動は慈善基金の設立、雑誌の出版、児童向けの学校と同じだけの比重が置かれる私塾の開設などであった。1978 年にはイズミルにおける「トルコ教師慈善基金出版」から『浸潤(Sızıntı)』を出版した。『浸潤』の目標は「自分たちの文化を守りつつ西欧の科学を受け入れる」ことであった。また 1986 年には『Zaman（時)』という名前の日刊紙を創刊し、祖国党、官製イデオロギーを支持していた。加えて金融機関バンク・アジア（Bank Asya）を所有し、その活動の利潤によって各種教育機関がトルコの内外で運営されている。各機関がギュレンのトルコ人だけがトルコ性（Türklük）を持つのではなくクルド人や中央アジアのチュルク系民族もトルコ性を所有するとい思想を広める役割を担っていた。[22]フェトフッラージュは今やアジア・アフリカ併せて 200 校以上の学校を所有し、1996 年にはトルコ国内に総合大学も開設している。

また 1977 年選挙では「新アジア派（Yeni Asya)」が正義党支援プロパガンダを行う一方、共和人民党を批判し、デミレル全面支持を表明した。1980 年の軍事クーデターの際に新アジア紙は一時活動休止を命じられ、新しく「新世代（Yeni Nesil)」紙を創刊した。クーデターのトップであったケナン・エレン元大統領に対し理性的な形での批判を行なった。その後新アジア紙の活動休止命令が解かれ 1993 年以降両新アジア派、新世代派が分かれて活動を続けていった。新世代派は正道党を支持している。

1989 年にはコーラン党と自ら名乗る「開ー花（Med-Zehra)」によって『Dava（宣教)』誌が創刊された。[23]彼らは『光の書簡』の刊行事業に参入したが、オスマン語での複写を行なっていたために、多くの人に理解されたいという彼らの意図とは裏腹に現代人には理解しづらい内容となっていた。

またトルコのインテリの間で人気だったのは、メフメト・メチネルが分派してできた「企画」というグループである。彼らは穏便イスラームに対する反乱と西欧の社会学の混合体としての位置づけであった。[24]

第二節　フェトフッラージュの研究動向

現在ヌルジュ最大の派といえばフェトフッラージュであるということは否めない。日本語の整備されたサイトも数多くあり、最近はフェトフッラー・ギュレンが執筆した日本向

---

[21]中田論文 p .5
[22]大庭論文 p .186
[23]Yavuz, M Hakan. *Islamic political identity in Turkey*, Oxford; New York: Oxford university Press 2003 p.179
[24]中田論文 p .7

けの書籍も販売されている。[25]

しかしギュレンはヌルジュではないという意見もある。[26]ギュレン自身が Nursi の弟子であることを明言せず、Nursi の言葉を引用する際もその名に言及しない。このためここではヌルジュ運動とは異なる運動と考え、分析から除外する。[27]ギュレンは「穏健派」のイスラーム指導者であり、またトルコ主義者であるとみなされている。[28]トルコ人だけが彼の教えを受けることができるのではなく、オスマン帝国で歴史を共有した民族はみな同じであるとしている。また Nursi や『光の書簡』を強調し Nursi のよさや素晴らしさを説くのではなく、抽象的に普遍的な理想を語り、気づかぬうちに社会に浸透させるという戦略である。これらの点から、次に見るヌルジュ各派とは性格を異にしているといえるだろう。

[25]M.F.Gülen 樋口めぐみ訳『日本人のために預言者ムハンマドを語る』K&K プレス 2002
[26]主に M.H ヤヴズ「もうひとつのトルコ・イスラーム運動 : ヌルジュ運動とフェトフラフ・ギュレン」『現代中東研究』3（1999）; 中田考「トルコのイスラーム主義『ヌルジュ』運動 : フェトフッラージュを中心に」『中東研究』461(2000) ; 粕谷元「トルコのイスラーム潮流 : ヌルスィーとギュレン」小松久男、小杉泰（編）『現代イスラーム思想と政治運動』イスラーム地域研究叢書 2、東京大学出版会 2003 などが代表的な研究者として挙げられている。大庭論文 p .197
[27]大庭論文 p .186
[28]粕谷論文 p .80

第三章　ヌルジュの活動内容～新アジア派～

第三章、続く第四章では、今まで挙げてきたヌルジュの組織単位に、主にインターネットのサイトからの情報からにより各組織が現在立ち上げている財団、ホームページ、新聞や雑誌、ラジオの紹介、そして内容を紹介する。現在ヌルジュの活動は多岐にわたっているがインターネット上の空間は重要な宣伝媒体となっているからである。これによりヌルジュ全体の特色や活動理念などを実際の活動から読み取っていくことが可能になるだろう。

第一節　新アジア新聞

（http://www.yeniasya.com.tr）

まずヌルジュが運営している組織として第一には新アジア新聞とともに Yeni Asya Vakfı（新アジア財団）が挙げられる。名前の通り新アジア派の運営する組織である。

まず新アジア新聞は日刊紙であり、1970 年 2 月 21 日に創刊された。1979 年には新アジア調査センターが作られ、1980 年には雑誌「橋(Köpürü)」、1981 年には子供向け雑誌である「心の兄弟(Can Kardeş)」が創刊された。また 1990 年には新アジア新聞の兄弟会社として新アジア出版社も設立された。現在でも新アジア新聞を中心とした様々な活動を行なっている。[29]

政治方面から見てみると、新アジア新聞は 1980 年には公正党の支持を表明している。国家秩序党の党首であったネジュメッティン・エルバカンが公正党の党首であるデミレルをに批判したことによりヌルジュたちと政治との対立が始まったという。また、新アジア新聞のホームページに掲載されている情報はというと、新聞社としての役割である様々な分野におけるニュースはもちろん、『光の書簡』の販売や関係する雑誌のリンク、また特別なものとしては礼拝の時間や購買者の集まりの連絡なども掲載されている。新アジア新聞が位置づける自身の見通しは、「人類の幸せのために相違点を尊重する人々とともにその時代がもたらした技術や通信手段を利用して物質的なものと精神的なものの価値を正しいムスリムのもとで解釈される文明を人々に提供すること」であるとしている。また彼ら自身の使命として「テクノロジーの時代に求められるものそして規範性を備えた社会の期待に答え、行動的であり参加的な人々とともに正しいイスラームを人々のもとにもたらすこと」としている。

[29]Sağ sözlüğü p .420

第二節　新アジア財団

（http://www.yeniasya.org.tr/sayfalar/sayfa_10.asp）

新アジア財団は 1993 年に設立され、現在は 4 つの委員会に分かれており、そのそれぞれが役割を担っている。それぞれの委員会とは：①Sosyal Ve Kültürel Faaliyetler Komisyonu（社会文化活動委員会）、②Tüzük Hazırlama Komisyonu（規則準備委員会）、③Sesli Ve Görüntülü Neşriyat Komisyonu（音声視覚出版委員会）、④Neşriyat Hizmetleri Komisyonu（出版職務委員会）に分かれている。また新アジア財団の目的とは、国民的、道徳的、宗教的、歴史的な基礎において科学の働きを世に伝え、個人がこの知識によって個性を得ることを勤め、全ての種類の活動を行なうことにあるという。[30]また『光の書簡』と Nursi を広く知れ渡らせるために活動を行なった。ドイツでのゴンジャ若者センターを設立するための援助を行い、若者にスポーツや文化的な活動を促進させるためにも活動を行なっている。また財団の目標を全うするためにイスタンブルで女性宗教センターを設立させ、ここでは大学で学んでいる女性に対し専業主婦になるよう活動を行なっている。[31]

[30]Yeni Asya Vakfı ホームページより（訪問者数 1173038 人）
[31]右辞典 p .420

第三節　新アジア出版

（http://www.yeniasyakitap.com/turkce/index.asp）

また新アジア新聞から派生した新アジア出版は、ホームページを通じて通信販売ができるようになっている。『光の書簡』に限らず新アジア出版が手がけている全ての本が購入できるようになっている。『光の書簡』に関してはいろいろなサイズの本が出版されていて、用途にあわせて選ぶことができるようになっている。他のジャンルの本はというと、子供向けの本や長編小説、歴史関係や文学関係のものまで至るが、そのほとんどが宗教に関係した本である。圧倒的に Nursi に関する本が多い中で、子供向けの本も多数出版されている。

第四節　雑誌『橋』

（http://www.koprudergisi.com/index.asp?Bolum=Anasayfa）

雑誌『橋（Köprü）』のホームページでは記事が中心のデザインとなっている。イスラームや Nursi に関するアカデミックな情報や雑誌の講読の申し込み、過去の記事の検索や最新刊も検索できるようになっている。また販売店のリストも詳しく掲載されており、その数はトルコ国内ではイスタンブルの 17 店舗を含め 123 店舗ある。また国外ではアメリカ、イギリス、オーストラリア、ドイツの 4 つの場所でも販売されている。

第五節　雑誌『心の兄弟』

（http://www.yeniasya.de/cankardes/）

また雑誌『心の兄弟（Can Kardeş）』のホームページでは、子供向けの漫画が主に掲載されている。その一方で、子供だけではなくその親のために作っただろうページも掲載されている。例えば編集長からのメッセージや、トルコにおけるこれまでの宗教的な歴史やもちろん Nursi についてという内容は、とても子供が読めるようなものではなく、字の大きさも大人向けといえるものである。そのほかは、塗り絵、物語、ゲームやパズルなどもある楽しげなサイトとなっている。

第六節　雑誌『若さに接近』

（http://www.gencyaklasim.com/）

雑誌『若さに接近（Genç Yaklaşım）』のホームページでは余計な装飾のないすっきりとした見た目でありながら、Nursi のすばらしさやこれからイスラームに精進することの進めなどを暗に記事に盛り込んでいることがわかる。またその他の、例えばワールドカップのその後や宗教や Nursi にまったく関係のない社会的な問題なども取り上げている。対象は若者から大人までであると推測されるこの雑誌は、これからイスラームに目覚めさせるための啓蒙雑誌であるといえるだろう。

第七節　雑誌『私たちの家族』

（http://www.yeniasya.de/bizimaile/）

新アジア新聞、新アジア出版が所有している４つの雑誌のうちの最後の雑誌は『私たちの家族（Bizim Aile）』というタイトルである。この雑誌のホームページを見ると、対象は新しく家族を持った人や新生児や子供を持っている夫婦向けだといえる。子供の悩み相談や、子供の健康または、健康でいるための秘訣などが中心の記事となっている。またこのホームページを見た人の感想を見ることができるコーナーがあり、感想のほとんどが「このサイトはすばらしい」「役に立つ記事をのせてくれてありがとう」などであった。また定期購読やメーリングリストの申し込みもこのページからできるようになっていて、接触しようと思えばすぐに可能である状況をつくっている。

第八節　光の書簡研究所

（http://www.risaleinurenstitusu.org/）

また雑誌ではないが、新アジア新聞、新アジア財団や各雑誌に必ずリンクが乗っているサイトがある。「光の書簡研究所（Risale-i Nur Enstitüsü）」というタイトルであるこのサイトは、掲載されている記事の中で最も日付が古いもので 2000 年 3 月 23 日であった。その後一週間おきに約 10 の記事が新しく加えられている。[32]記事の内容というのは、そのほとんどが Nursi と『光の書簡』に関するもので、「科学と光の書簡」や「健康と光の書簡」など、近代科学や人々の暮らしに関係性を持たせる内容の記事が多数を占めていた。加えて毎週の記事の中には連載的な役割を見せているものもあり、「文字の意味（Mana-i Harfi）」と「ポートレート（Portre）」というタイトルのついた記事は毎週掲載されている。2006 年 3 月 26 日にはこのサイトが主催した会合がイスタンブルで開かれ、掲載されているその模様の写真を見ると、相当な数の人数が参加したと思われる。
またこのサイトは 1997 年に Nursi に関する研究を行ないながら、出版することを目的とした「光の書簡研究プロジェクト」という企画を立ち上げたとしている。[33]事実このホームページによれば、すでに 8 種類の本と 3 種類の CD が出版されている。本の内容は Nursi の研究書がほとんどだが、中高生向けの啓蒙書も見受けられた。CD はというと、Nursi

[32]一番最近の記事は 2006 年 7 月 7 日であった。
[33]研究所ホームページ

の生涯や『光の書簡』を音読したものがある。Nursi や『光の書簡』に関する質問なども受け付けており、回答の返信も多くある。また『光の書簡』の多くはオスマン語の表現が使われておるが、困難な表現専用の辞書まで掲載されている。このように機能するサイトがあることによって『光の書簡』を読む人をサポートしているといえるだろう。

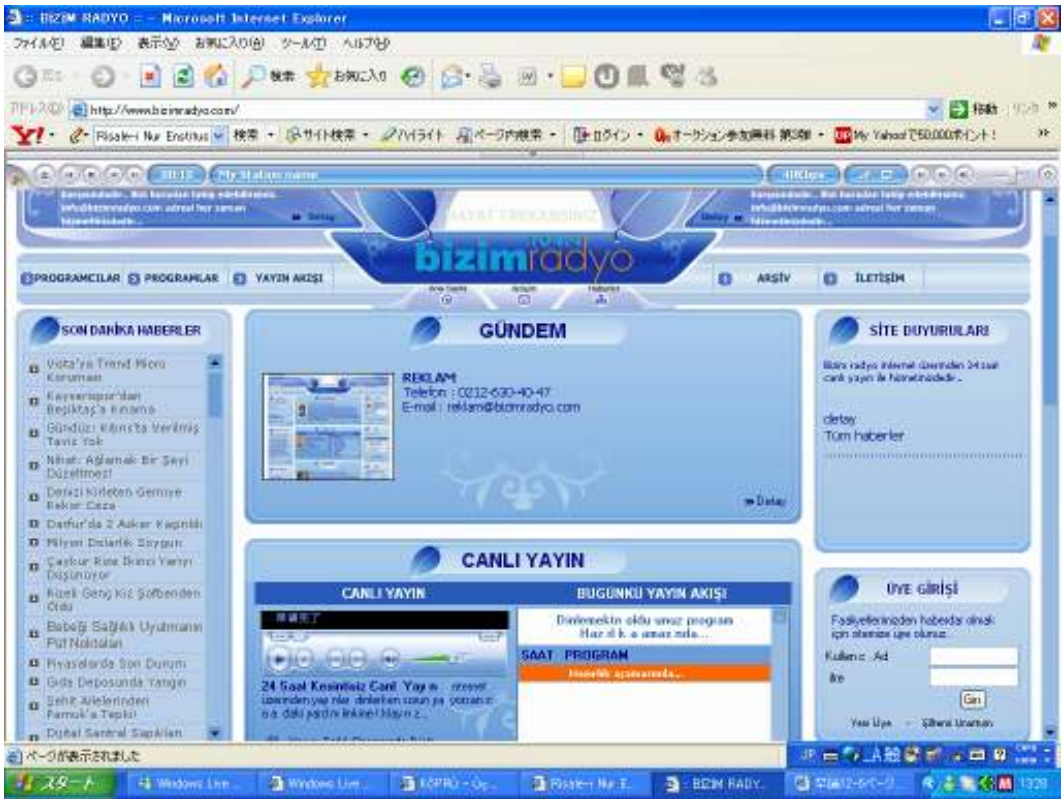
第九節　私たちのラジオ

（http://www.bizimradyo.com/）

新アジア派関係のサイトに必ずリンクされている「Bizim radyo（私たちのラジオ）」というオンラインラジオを提供している。トルコ国内の 19 の新聞社、4 つの雑誌と提携してラジオで流している。[34]19 の新聞社の割合は新アジア新聞からのニュースが最も多く 1207 点で、二番目に多いのが Zaman（時）新聞で 642 点であった。そのほかはどれも僅差で 300 から 500 の間に留まっている。オンラインラジオはスムーズに誰でも聞くことが出来、その内容はというと、啓蒙するような音楽を流したりニュースを読み上げたり様々である。またこのラジオに関しての活動がメールで知らせてもらえるという特典のメンバーになることも出来、現在までのメンバーは 968 人とかなり多くの人がこのオンラインラジオに興味を持っていることがわかる。しかしサイト上のその他の内容はあまり整備されていなく、サイトの管理者の情報やプログラムを製作した人の情報など、そのほとんどが準備中とい

[34]4 つの雑誌とはいずれも上記の雑誌である

う表示が出るものである。



第十節　ウスパルタヌル

（http://www.ispartanur.net/）

また Nursi が軟禁生活の中で滞在していたウスパルタ地区のヌルジュのサイトである「Ispartanur（ウスパルタヌル）」であるが、やはり『光の書簡』を中心としたものとなっている。またこのサイトの特徴としては Nursi だけでなく Nursi に仕えていた重要人物 8 人も紹介している。それぞれに対しての自伝、写真、また声なども掲載されている。加えて各国言語での『光の書簡』として日本語も含め 26 言語での閲覧が可能になっている。インターネットのサイトであるという点を利用して世界各国の『光の書簡』に興味を持った人のために隔てなく情報を与えることを可能にしているといえる。

第十一節　ユーロヌル

（http://www.saidnursi.de/tr/index.php）

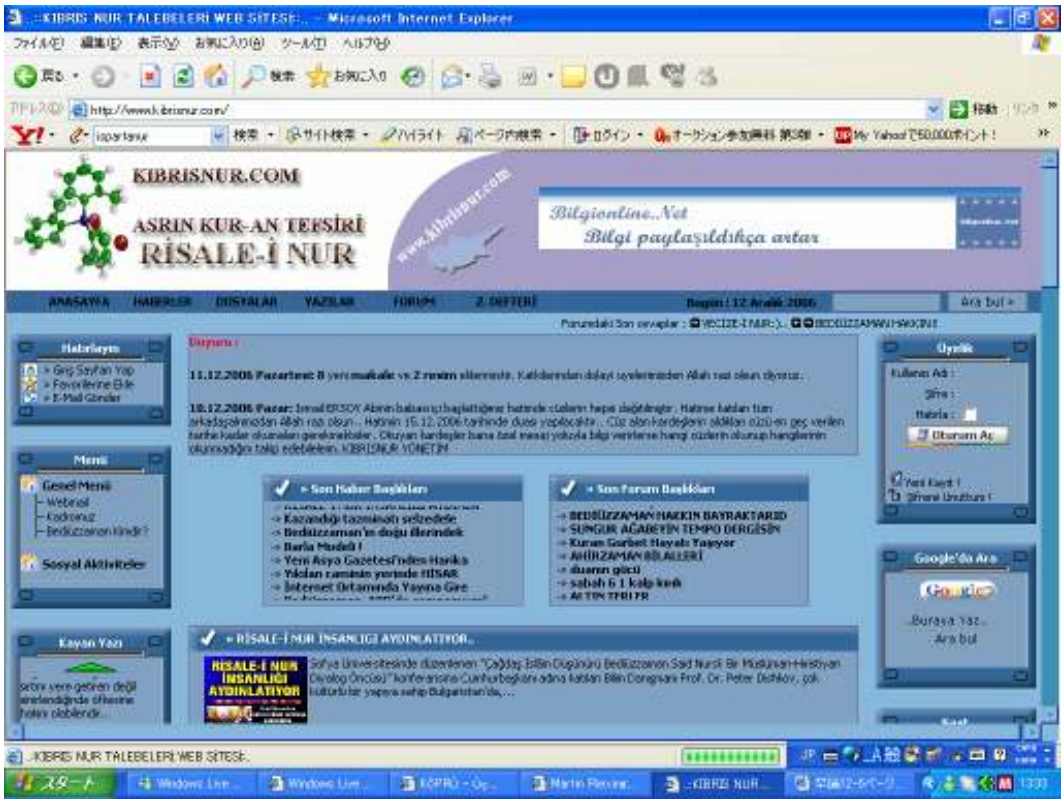
国外においても「Euro Nur（ユーロヌル）」というドイツのトルコ人によるサイトも見受けられる。内容は全てトルコ語になっており、雑誌「橋」の紹介や新アジア新聞がリンクされていることなどから、このサイトも新アジア派であるといえる。このサイトは『光の書簡』が中心というよりは Nursi や『光の書簡』、または他のイスラームに関する素朴な疑問やそれに関した記事などを紹介することが主な内容である。記者として名前が挙がっているのは 9 人で､その中の一人は教授という肩書きがついている人もあげられている。またヨーロッパのトルコ人向けのサイトという点での特徴は､「今週のヨーロッパ」というコーナーを設け、トルコ語でヨーロッパの主なニュースを紹介している。そのことでヨーロッパにいるトルコ人が、現地の言葉が理解できなくても身近で起こっていることを知ることができ、また新アジア新聞にリンクしてることによりトルコのニュースも見ることができる。また『光の書簡』の通信販売も行なっていて、手軽にパソコンの壁紙を入手することもできるコーナーもある。近代的なニーズを取り入れたサイトであるといえる。

第十二節　キプロスヌル

(http://www.kibrisnur.com/Haberler.asp?goster=kat&id=2)

そして最後にキプロスでのヌルジュのホームページとして「Kıbrıs Nur」がある。このサイトの特徴としては、『光の書簡』や Nursi の情報や知識を得るためのサイトとしてではなく、キプロスに住んでいる同じヌルジュたちのつながりを作るためのサイトとしての役割が大きい。現在[35]での「メンバー」は 312 人であるが、もしメンバー同士が同じ時間にサイトを訪問していたら、お互いの情報を交換することもでき、自由にコミュニケーションをとることができるという仕組みになっている。また EuroNur に比べたら少数ではあるが、トルコで起きたニュースや、Nursi に関するニュースも掲載されていて、どのくらいの人が同じニュースを読んだか、またそのニュースに対する感想なども書き込むことができるつくりになっている。

[35]11 月 15 日現在


KIBRISNUR.COM
ASRIN KUR-AN TEFSİRİ
RİSALE-İ NUR
Bilgionline.Net
Bilgi paylaşıldıkça artar

第四章　新世代派

第一節　新世代出版

（http://www.nesilyayinlari.com/index.php）

新世代派は前述のように 1992 年に新アジア派から分裂し、正道党を支持している派であるが、現在は独立して活動している。基盤となっているのは「Nesil Yayınları（新世代出版）」という出版社である。イスタンブールに本社を置いている「新世代出版」のホームページによると、「我々の目的はわれらの国を学校にすることである」というスローガンを掲げ、1968 年から活動を続けている。また当時から問題であったという一般市民と専門家の知識の差を縮めるということを目標とし、日々進化している出版業界において可能な限り活動をしている。そのことによって、出版を手がける本の種類、ジャンルを増やすことによりその目標により近づけるとしている。また、出版する本の宣伝をする労力を怠らないことによって、本と市民の関係をより近しいものにする努力をしているという。現在、1500 以上もの製品を製作し、その種類は子供向けの絵本から百科事典、小説、博士論文やカセットテープ、ビデオなど様々な分野に及んでいるという。[36]

新世代出版のホームページはというと、製品の紹介が多くなっている。ネット販売にはメンバー登録をする必要があるが、新世代出版が手がけている製品の全てをインターネットから購入することができるという仕組みになっている。手がけている製品といっても、書籍だけでなく上記にもあるとおりカセットやビデオなども扱っている。書籍の種類も子供向けの本といっても学年別に分けられてい、小説も短編小説や長編小説、詩集やファンタジーなどのジャンル別に分けられているために、ニーズにあった検索がしやすい構造になっている。またアカデミックな内容の書籍も多数扱っており、研究論文や伝記なども豊富な種類が見受けられる。Nursi についての研究所は現段階では 14 作品が紹介されている。また、「ナマズの時間にどうやって起きるか」というタイトルの本や、またコーランの解説書なども扱っている。現在新世代出版では 122 のイスタンブールでの販売店があり、また海外ではドイツに一店舗販売店がある。また 78 の市や町でもそれぞれに販売店があり、各市においても 10～20 程度の店舗が置かれている。アンカラは 37 の販売店が置かれていて、イスタンブールの次に多い。このことから、イスタンブールを中心に活動を行ない、イスタンブールに最も力を入れているということがわかる。

[36]新世代出版ホームページ

第二節　モラル FM

（http://www.moralfm.com/index.php）

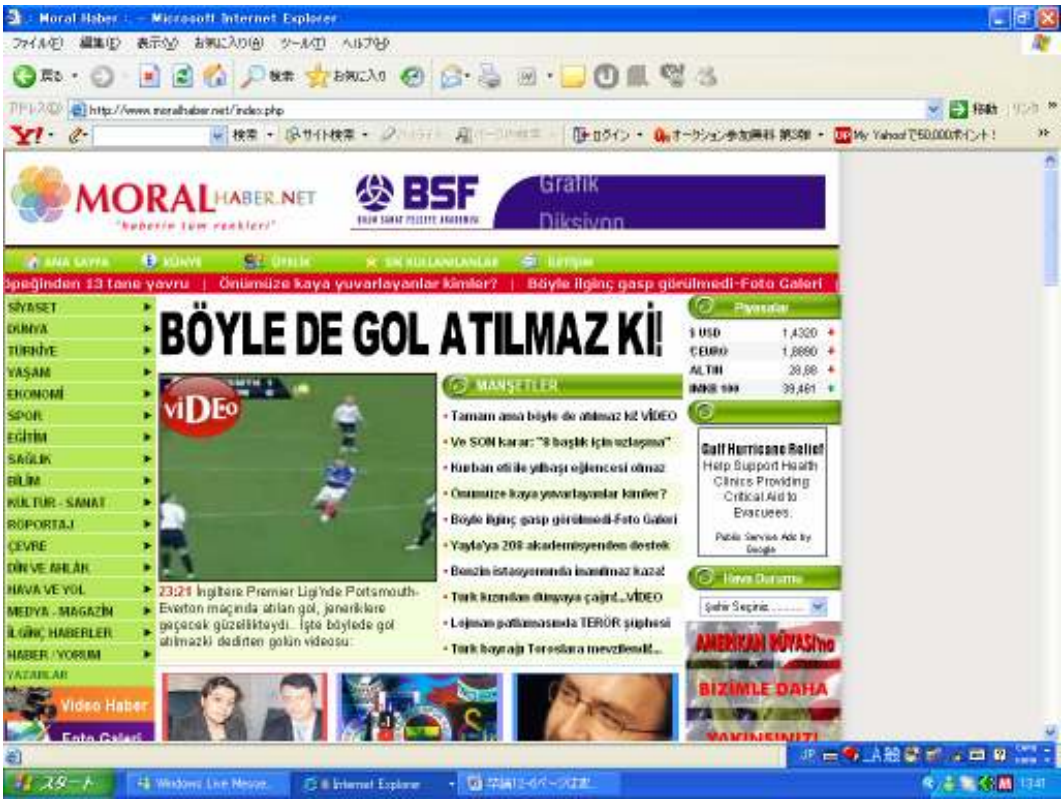
また新世代は 1995 年に設立した「Moral FM（モラル FM）」というラジオ放送局も所有している。インターネットを通しても視聴することができ、番組表などを見ると、ニュースを中心とした 24 時間のラジオ番組を制作している。音楽番組やニュースはもちろん、リスナーの生き方を考えさせるような番組や、共感できるようなエピソードを読み上げたりするコーナー、またコーランを朗唱している番組などがある。またサイト内に 31 の新聞社をリンクしており、簡単に見たい新聞のホームページに移動できるようになっている。また 32 人の番組編集者それぞれに対してもメールアドレスが記載されており、簡単にメールを送ることができる仕組みになっている。

第三節　モラルニュースネット

（http://www.moralhaber.net/index.php）

またモラル FM のニュースをクリックすると、提携されているニュースを提供するサイトに移動するようになっている。そのサイトとは「Moral Haber net（モラルニュースネット）」である。このサイトは常に最新の情報を提供できるようになっており、ジャンルごとに分けられて検索することができるだけでなく、最も新しいニュースから順番に見ていくこともできる。またこのサイトからも各新聞者のサイトがリンクされており、他の新聞社においても多数の検索をすることにより、さらに詳しい情報を得ることができる。またメンバーになることもでき、最新の情報が最新の状態で手元に届くというメリットがあるという。[37]

[37]モラルニュースネットホームページより



第四節　モラル雑誌

（http://www.moraldergisi.com/）

モラル FM から派生した雑誌もある。「Moral Dergisi(モラル雑誌)」という名前のその雑誌は、モラル FM のホームページ同様、インターネットを通じてモラル FM を視聴することができる。それだけを見ればラジオのホームページがあればいいということになるが、このモラル雑誌のホームページの特徴はというと、雑誌であるという長所を生かし絵や写真が多数ホームページ内のサイトに掲載されているという点である。また、「今月」というコーナーにおいては、今月の雑誌に掲載されている記事を簡単に検索することができる。検索された記事はかなり詳しい情報まで書かれており、やはりラジオと雑誌の違いは情報量として表示している。このホームページのリンクはというと、新世代派が運営している大部分のサイトにリンクされていて、興味を持った人はすぐに先述した新世代出版やモラル FM だけでなく、後述する「新世代カレンダープロモーション」や「新世代料理サービス」にもすぐ移動ができる仕組みになっている。

第五節　新世代カレンダープロモーション

（http://www.nesiltakvim.com/main.htm）

「Nesil Takvim Promosyon（新世代カレンダープロモーション）」は今までのとは違う指向になっている。通信販売が中心のサイトであり、思想や考え、情報などを提供する場とは少し違う内容である。「カレンダープロモーション」というだけあってカレンダーの通信販売を主に行なっているようである。様々な形のカレンダーや、時計つきのカレンダー、卓上時計、壁掛け、腕時計、またデスクの上に置くためのメモ帳やペンのセット、またクリスタルの置物や優勝カップの販売も行なっている。「私たちについて」という組織紹介のページはまだ完成されていなかったので詳しい目的などは明記されていないが、様々な分野の需要に対応できるように勤めているのだろうと考えることができるだろう。

第六節　新世代料理サービス

（http://www.nesilcatering.com/index.htm）

また「Nesil Catering（新世代料理サービス）」は、「新世代会社グループ」において 1997 年から活動を始めた組織である。[38]新世代料理サービスの活動はというと、料理の配達サービスを行なっている。また配達サービスだけでなく、スープ、ピラフ、主食などのレシピと作り方の簡単な紹介をしている。注目された点は、組織図紹介の部分で、新世代派を強調しており、他の新世代派のサイトに簡単に移動できるようになっている点である。料理とはまったく関係のないサイトもリンクさせており、逆に他の料理関係のサイトはまったくリンクされていなかった。

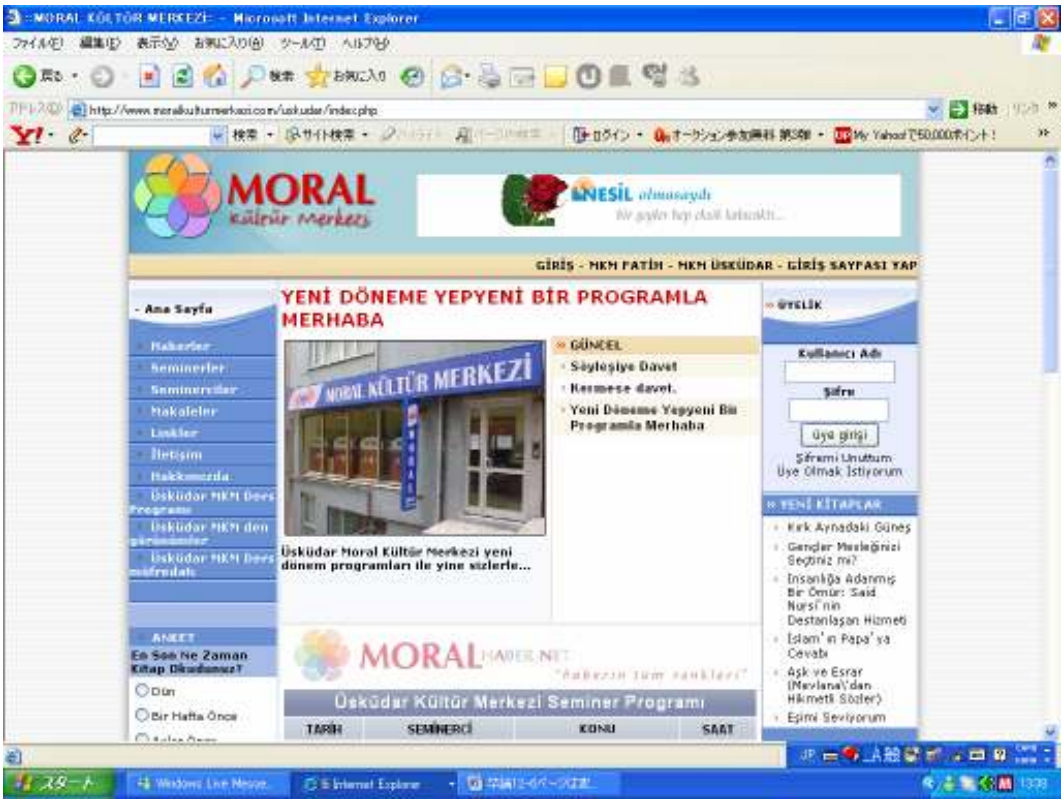
[38]新世代料理サービスホームページより

第七節　モラル文化センター

（http://www.moralkulturmerkezi.com/）

新アジア派同様新世代派においても、地域ごとのサイトを運営している。それが「Moral Kultur Merkezi（モラル文化センター）」という名前のサイトである。このサイトではファティフ（Fatih）かウスキュダル（Üsküdar）という二つの地域の活動が紹介されている。まず Fatih のサイトでは、9 月からの新授業時間割という文字が最初に目に付く。開いてみると、授業時間は 10 時から 13 時まで、11 時から 14 時までなど様々であるが、平均 1 時間半から 2 時間の間の授業時間でもって、火曜日から日曜日まで毎日 1 コマから 2 コマ行なわれているようである。その内容は『光の書簡』についてのことが主で、土曜日の 14 時 30 分から 16 時まではセミナーというのが授業のテーマとなっている。セミナーというのは、サイトに登録されている報告者の中から週代わりで一人ずつ講演会を行なうということである。報告者というのは何らかの専門家であり、宗教や家庭のことについて詳しい人が 10 人おり、毎週一人ずつ専門の話題について話していくものである。また記事もいくつか掲載されており、自然の動きについて、感情について、生き方についてといった内容の記事が見受けられた。加えて同じ新世代派の系列である「新世代出版」から出版している本もいくつか紹介されており、クリックするとそのまま新世代出版のホームページに移動する仕組みになっている。

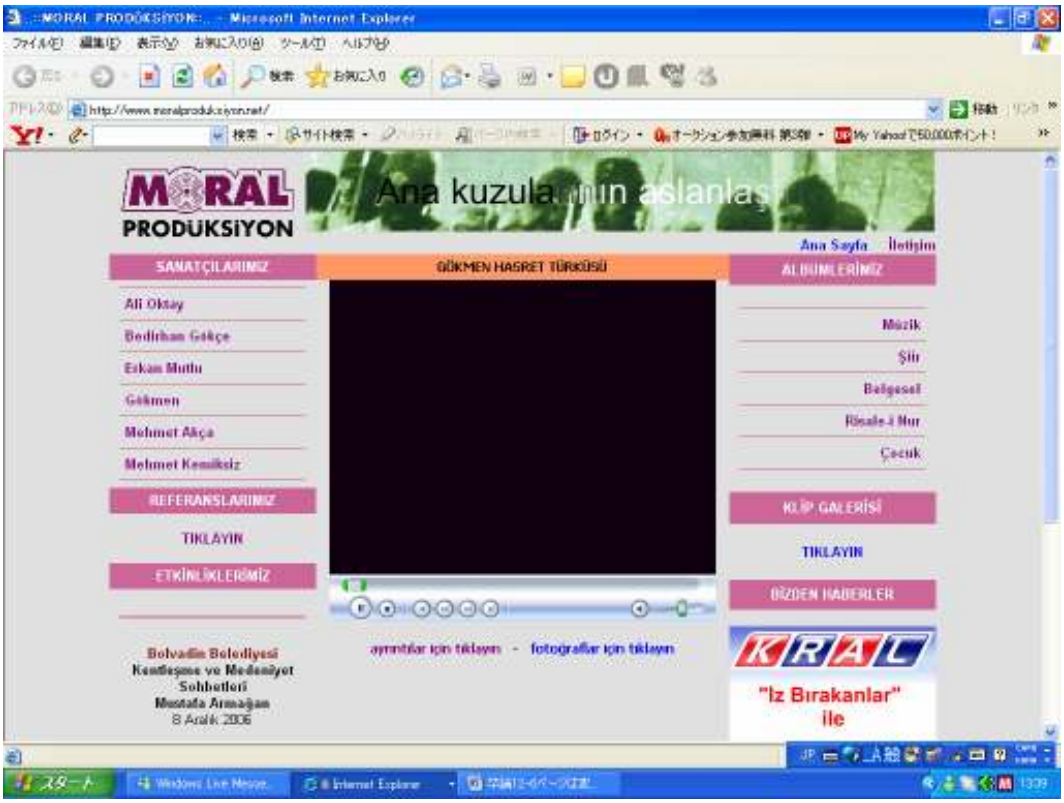
またウスキュダルのサイトはというと、ほとんどファティフのサイトと同じデザイン、つくりになっているが、授業のプログラムや記事なども若干の違いが見受けられる。セミナーもファティフ同様週一回土曜日に開催されているが、登録されている講演者のメンバーは同じ人であった。この二つのサイトは主にファティフとウスキュダルでそれぞれ行なわれる授業の広報としての役割が大きいといえるだろう。同じイスタンブールの中の二つの地区にある教室を説明するために二つの異なったサイトを作る必要性を挙げるとしたら、それぞれ異なったタイミングで行なっているセミナーや授業への受講生を増やすという目的が感じられる。



第八節　モラルプロダクション

（http://www.moralproduksiyon.net/）

また新世代会社グループの会社リストの中には「Moral Prodüksiyon（モラルプロダクション）」というサイトがある。モラルプロダクションでは Ali Oktay、Bedirhan Gökçe、Erkan Mutlu、Gökmen、Mehmet Akça、Mehmet Kemiksiz という 6 人の歌手をプロデュースしているということがわかる。6 人それぞれの略歴がアルバムの写真と一緒に掲載されている。またこのサイトにおいて 6 人のアルバムを視聴することができ、また最新情報、公式ホームページなどもリンクされている。加えて、『光の書簡』や、Nursi のドキュメントを描いた書籍や子供向けにアレンジされた Nursi の生涯の CD-Rom なども製作しており、紹介されている。このように新世代派は、新アジア派から派生したものの今や新アジア派と同様の活動を行なっていることがわかる。


::MORAL PRODÜKSİYON:: - Microsoft Internet Explorer
http://www.moralproduksiyon.net/
MORAL
PRODÜKSİYON
Ana kuzula, mın aslanlar
Ana Sayfa
İletişim
SANATÇILARIMIZ
GÖKMEN HASRET TÜRKÜSÜ
ALBÜMLERİMİZ
Ali Oktay
Bedirhan Gökçe
Erkan Mutlu
Gökmen
Mehmet Akça
Mehmet Kemiksiz
Müzik
Şiir
Belgesel
Risale-i Nur
Çocuk
REFERANSLARIMIZ
TIKLAYIN
KLİP GALERİSİ
TIKLAYIN
ETKİNLİKLERİMİZ
BİZDEN HABERLER
Bolvadin Belediyesi
Kardeşme ve Medeniyet
Sohbetleri
Mustafa Armağan
8 Aralık 2006
ayrıntılar için tıklayın - fotoğraflar için tıklayın
KRAL
"Iz Bırakanlar"
ile

第五章　インターネットでの活動の特徴

第三章、第四章と新アジア派、新世代派のインターネットサイトを通して活動を見てきたが、その活動の特徴を見ていきたいと思う。本稿の分析によると、４つの特徴が挙げられる。

まず第一に、彼らがインターネットを通じて、個人個人と直接接触しようとしていることがよくわかった。インターネットを通じた活動であるということから、サイトから個人に直接情報を提供することができる。一人一人が望んでいる情報を的確に引き出すことができるという特徴は、どのインターネットサイトも同じであるが、いくつかのサイトにはメンバー登録ができる制度があった。メンバーになることによってさらに望む情報を引き出しやすくなり、サイトを作る側が個人を大切に考えているということが特徴として挙げられると思う。

第二に新技術の積極的な利用が挙げられる。ラジオの試聴ができるものや、特定のサイトに接続するだけで音楽が流れてくるものもあった。あるいはデザイン性が高い、便利性を考えたページ設計を行なっていることで、新技術に対応しているということがわかる。特に「新世代プロダクション」や「私たちのラジオ」のサイトに強く感じられた点である。

第三に新アジア、新世代両派のいずれにおいても、資金調達のための販売活動がインターネット上で積極的に行われており、インターネットを通じた経済活動がその特徴となっている。『光の書簡』や多数 CD などの通信販売を行っているサイトが多数存在していた。これは組織的な資金集めを行なっていることを表している。

第四に、子供、若者向けのサイトが、彼らが親近感を持てるよう構成されている点も特徴といえる。サイトの閲覧ターゲットは成人男性だけではなく、広い年代の男女であるといえるだろう。例えば「モラル文化センター」は毎日定期的にセミナーを運営し、その参加者は制限がなく自由参加ができる形式となっている。また新アジア派の雑誌各誌のサイト、新世代派の文房具や音楽などと関わっているサイト運営あるいは活動をみると、親しみやすさを活動の方針に取り入れていることがわかる。

しかし本論で紹介したサイトが新アジア、新世代派のすべての活動というわけではない。また両派の活動、運動がヌルジュという組織の中でどの程度の割合を占める部分なのかという研究が足りなかったように思う。しかし、インターネット上での活動に注目することにより、いくつかの特徴は明らかにすることができたといえるだろう。インターネットサイトには一定の購読者、メンバー登録者、または閲覧者が存在している。または定期的にサイトが更新されていることから、何らかのメッセージ掲載の必要性が存在し、それらは閲覧者によって受け止められていると考えられる。活動の活発さは、ホームページの更新の頻繁さにあらわれている。

Nursi はトルコのイスラーム主義者全ての尊敬を勝ち得ることになった一方で、その後継者たちの活動は Nursi 個人ばかりに気を取られ、世界のイスラーム運動の進展からは取り残されていったという。[39]その結果、ヌルジュは内部分裂も重なってトルコにおけるイ

[39]中田論文ｐ.8

スラーム主義戦線内部での全国レベルでの影響力は失ったという評価を受けている。[40]

しかし、今もなおヌルジュはインターネットを中心に多方向にわたる活発な活動を行っている。これまでの研究でヌルジュ運動が、世俗主義改革に対応し切れなかった人々を取り込み、穏健な宗教思考を持つ人々の精神的なよりどころとなっていたことは明らかになっている。[41]また現代科学にも柔軟に対応できる面を持っているということはヌルジュ運動の特徴として挙げられている。ヌルジュはイスラーム運動においてその初期から新しい技術である印刷文化を活動に利用し、トルコ社会の識字率向上を促進した。[42]こうした時代とともに移り変わる変化に対し寛容で受け入れていくという態度は現在も続いているといえるだろう。本稿で検証したインターネットサイトを見ていくと、最新技術に対応しているという点、技術を使用することにためらいが感じられないという点でそのことは再確認される。本稿においてインターネットサイトというツールを検証したことにより、ヌルジュ運動はイスラーム運動に対し新しい可能性を提示していることがわかった。古い形式に固執していると思われがちなイスラーム運動において、ヌルジュはこれからも最新技術を用い、誰にでも親しみやすい形式での活動を続けていくだろう。

---

[40]中田論文ｐ.8

[41]粕谷論文ｐ.82

[42]Yavuz, M Hakan *Islamic political identity in Turkey*, Oxford; New York: Oxford university Press 2003ｐ.172

終章

本論ではまず第一章において Nursi Said の生涯を見ていくと同時に年代別の彼の思想の移り変わりを見てきた。そのなかでヌルジュがどのように形成されていき、また Nursi が人々にどのように影響を与えていったかを振り返った。次に第二章では、ヌルジュが形成され、さらにひとつのグループにはとどまらず分派に分派を重ねている各派を大きく 8 つに分けて取り上げた。その中での新アジア派、新世代派の活動を見ていったのが第三章、第四章である。具体的にはホームページを中心にした分析であったが、詳しく見ていくことによってそれぞれの特色が見えていたと思う。続く第五章ではその特徴を分析している。

しかし、本論で取り上げたホームページのほかにも、膨大な数の Nursi やヌルジュについてのサイトがあることは明らかであり、今回は新アジア派と新世代派の二派に絞り見ていったため、ヌルジュという大きな括りの中の二派というよりは、単なる紹介という形になってしまった点は否めない。さらに言えば、ヌルジュ自体もトルコに存在する宗教団体の中では一組織としての位置づけであるわけだが、その点も枠組みを示した上でのヌルジュというものには至らなかった点も心残りではある。

現在も活動を続けているギュレンのように、これからもヌルジュとして活動を続けていく、Nursi に取って代わるようなカリスマ性を持ち合わせた指導者が現れ、将来はさらに発展、拡大し続けていくであろうヌルジュネットワークについては、これからも引き続き研究を重ねていかなくてはならない分野であると思う。そしてこれからの時代は、国際社会と情報化社会の名の下に、更なるインターネットの重要性が明らかになるであろう。このような状況において、本論は現状の把握のための一助となることができたと思う。

参考文献

1921 年までの Nursi Said Bediüzzaman の書籍リスト

アラビア語

著書のタイトル	内容
Ishârâtü'l-I'jaz,	コーランの解説書
Taliqat＊	論理的な学術論文
Kizil Ijaz,	同上
al-Khutbat al-Shamiya＊	同上

トルコ語

Nokta
Shua'at,
Sünûhat
Münâzarat＊
Muhâkemat＊
Tulu'at
Lema'at
Rumuz＊
Ishârât＊
Hutuvat-i Sitte＊
Iki [Mekteb-i] Musibetin Shehadetnamesi＊
Hakikat Çekirdekleri

トルコ語の本はムスリムに対する解説書や道しるべとしての役割を持つ本。

＊＝複写が残っていないもの

日本語文献

粕谷元　2003　「トルコのイスラーム潮流――ヌルスィとギュレン」小松久男　小杉泰編『現代イスラーム思想と政治運動』東京大学出版会 63－83
中田考　2000　「トルコのイスラーム主義「ヌルジュ」運動――フェトフッラージュを中心に」『中東研究』461：2-12
大庭竜太　2006　「現代トルコにおけるクルド系ヌルジュ運動――メド・ゼフラの事例を中心に」『オリエント』49.　1：185－202

外国語文献

Mardin, Şerif 1989 *Religion and Social Change in Modern Turkey*. New York; New York Press

Yavuz, M Hakan 2003 *Islamic political identity in Turkey*, Oxford; New York: Oxford university Press

Hüdavendigar Onur, *Türk sağı sözlüğü,* 2005(3.baskı), İstanbul

ホームページ参照

Bediuzzaman Said Nursi's Official Biography（Nursi 公式伝記）（2006 年 9 月 1 日参照）
http://www.witness-pioneer.org/vil/Books/SV_Nursi/Default.htm

新アジア財団ホームページ（10 月 29 日参照）
http://www.yeniasya.org.tr/sayfalar/sayfa_10.asp
新アジア新聞ホームページ（11 月 5 日参照）
http://www.yeniasya.com.tr/2006/11/05/default.htm
新アジア出版ホームページ（11 月 5 日参照）
http://www.yeniasyakitap.com/turkce/index.asp
雑誌『橋』ホームページ（11 月 5 日参照）
http://www.koprudergisi.com/index.asp?Bolum=Anasayfa
雑誌『心の兄弟』ホームページ（11 月 7 日参照）
http://www.yeniasya.de/cankardes/
雑誌『若さに接近』ホームページ（11 月 7 日参照）
http://www.gencyaklasim.com/
雑誌『私たちの家族』ホームページ（11 月 7 日参照）
http://www.yeniasya.de/bizimaile/
サイト「光の書簡研究所」ホームページ（11 月 8 日参照）
http://www.risaleinurenstitusu.org/
サイト「ウスパルタヌル」ホームページ（11 月 10 日参照）
http://www.ispartanur.net/
サイト「ユーロヌル」ホームページ（11 月 11 日参照）
http://www.saidnursi.de/tr/index.php
サイト「キプロスヌル」ホームページ（11 月 15 日参照）
http://www.kibrisnur.com/Haberler.asp?goster=kat&id=2
ラジオ「私たちのラジオ」ホームページ（11 月 15 日参照）
http://www.bizimradyo.com/
サイト「新世代出版」ホームページ（11 月 21 日参照）
http://www.nesilyayinlari.com/index.php
ラジオ「モラル FM」ホームページ（11 月 22 日参照）
http://www.moralfm.com/index.php

サイト「モラルニュースネット」ホームページ（11 月 26 日参照）
http://www.moralhaber.net/index.php
サイト「モラル雑誌」ホームページ（11 月 26 日参照）
http://www.moraldergisi.com/
サイト「新世代カレンダープロモーション」ホームページ（11 月 27 日参照）
http://www.nesiltakvim.com/main.htm
サイト「新世代料理サービス」ホームページ（11 月 2 7 日参照）
http://www.nesilcatering.com/index.htm
サイト「モラル文化センター」ホームページ（11 月 28 日参照）
http://www.moralkulturmerkezi.com/
サイト「モラルプロダクション」ホームページ（11 月 29 日参照）
http://www.moralproduksiyon.net/